

〈主体〉と〈他者〉の戯れ

——または、『偽証の時』の〈本物〉と〈偽者〉の戯れ——

趙 美 京

一、はじめに

『偽証の時』は、一九五七年一〇月の『文学界』に発表された作品である。その二年後に、『偽証の時』とほぼ同一の出来事を取りあげた『報復する青年』が、『別冊文芸春秋』に発表される。この『報復する青年』は、まさに『偽証の時』をプレ・テキストにして書いたといえるほど、物語内容が類似している。この作品は、『偽証の時』の続編として意図されたといえよう。ただ、この二作品で関心を惹くのは、この二作品が、対立する二つの視点によって展開されていることである。『偽証の時』は、〈贗学生〉を〈監禁〉する〈本物の学生〉の一人である〈女子学生〉の〈私〉の視点をおとして叙述されている。それに比べて、『報復する青年』は、この〈監禁〉の〈被害者〉である〈贗学生〉の〈青年〉の視点から描かれている。つまり、語り手の位置が『偽証の時』と『報復する青年』では、〈T大学〉との関係およびジェンダーの面において逆転するのである。

先述のように、『偽証の時』は、〈女子学生〉の視線をおとして物語が展開する。大江の初期小説の中で唯一、女性を視点人物にすえたものである。そのため、先行論のほとんどが、この〈女子学生〉の視点に基づき、彼女の立場を肯定している。たとえば、中村泰行は、この作品にたいし「厚顔無恥な左翼学生が、主人公の人間的な抗議を抑圧し、主人公を絶望させてしまうという図式」を持っていると指摘しながら、「日本の青年を監禁している『壁』は、実は進歩的な学生であるということが示され」、それが「女子学生の眼をとおして学生の運動のリーダーが批判されている」という。宮内豊

は、この作品を「証拠湮滅、偽証、瞞着も辞さぬ左翼学生、ならびにそのシンパと覚しき教師、事務局などの、道徳的に腐敗した体質に対する怒り」を「女子学生の眼」をとおして「作者の主体的真実性」に沿って描いたと評価している。一方、篠原茂は「目的意識をもった思想集団の内部が「日常化」したときの恐怖という主題で現代の核心に光を投げ」て」と論じている。

このように、先行論のほとんどは、〈制度〉としての〈学生運動団体〉の欺瞞にたいする〈女子学生〉の批判といった観点で議論されている。しかし、本作品のいたるところに表れる〈真〉／〈偽〉、〈本物〉／〈贋者〉といった二項対立的な要素は、物語の中でどのような意味を持つているのか。そのうえ、この作品で、〈女子学生〉は、首尾一貫した批判者といえるのか、または「作者の主体的真実性」を代弁しているのか。なおかつ、タイトル「偽証の時」がしめしている、〈偽証〉の行為者は、〈歴史研究会〉の学生たちの行為のことだけなのか。こうした疑問は残る。

したがって、本稿は、〈真〉／〈偽〉、〈本物〉／〈贋者〉といった二項対立的な要素が、テキストで〈主体〉と〈他者〉の関係性からみた場合、いかに変わっていくのかを中心に考察する。つまり、〈歴史研究会〉の学生たちが、〈他者〉から〈主体〉へ変容することや、〈女子学生〉の〈他者〉化される過程を、〈本物〉と〈偽者〉の戯れという側面から考察し、『偽証の時』における大江の〈他者〉意識を明らかにする。

二、〈本物〉の偽への変容——やりきれない・仕方がない(どんづまり)の事態——

この物語は、〈T大学〉の〈歴史研究会〉に所属する学生たちが、ある〈贋学生〉を摘発し、彼を〈監禁〉するところからはじまる。〈贋学生〉の〈監禁〉は、ついで起こるすべての事態に関係し、登場人物の行動の範囲を制約し、左右するものとなる。それは、〈歴史研究会〉の学生たちは、意志の産物であるはずの〈監禁〉を意外にも一つの軛として受けとめていることからわかる。たとえば、〈歴史研究会〉のリーダー格である木田は、〈贋学生〉の〈監禁〉状況を「どんづまり」や、「泥沼」という。さらに、「どちらが監禁されているかわからないよ」という木田の言葉は、彼自身も、一種の〈監禁〉状態に陥っていることを表す。

こうした状態は、どこから生じてくるのか。これは、テキストの随所に散見される「やりきれない」、「仕方がない」、

「どうにもしようがない」などといった言葉が手がかりとなる。たとえば、次の①の木田と〈女子学生〉〈私〉との対話をみる。

①「どうなるんだろうなあ」と木田が私をすっかり狼狽させてしまうほど暗い声でいった。「あいつを監禁しておいてどうなるんだろう」「え？」

「あの男をここへずつと監禁しておくことはできないだろうか？ だからといって放り出したらあの男はすぐに警察へ駆けこむにちがいないんだ。ほんとうにあの男が警察のスパイだとしたら」

「ほんとうになんていうけど、あの男がスパイだというのははっきりしたことなんでしょう」と私はいった。

「はっきりしたことは何一つない」と木田がものうくいった。「証拠を掴まないで監禁したのは、まずかったなあ」

「証拠が上つてあの男がスパイだとわかってても、どうすることもできないわ」
「どうすることもできない」

「じゃどちらでも同じよ」と私はいつて顔をそむけたが木田は黙らなかつた。

(七三頁)

①は、木田と〈女子学生〉が、〈監禁〉された〈廣学生〉の事後処理をめぐり議論する場面である。〈歴史研究会〉は、〈廣学生〉の処理に困っている。この最大の理由は、〈廣学生〉が、〈国家権力〉を象徴する〈警察〉側の〈スパイ〉であるかもしれないからである。この意味からすると、〈監禁〉を行つている左翼系の学生側は、むしろ〈警察権力〉に〈疎外〉されている〈他者〉的存在である。また、〈歴史研究会〉のメンバーたちが、〈廣学生〉を警察の〈スパイ〉と恐れる限りにおいて、〈廣学生〉は〈国家権力〉側に立っている〈主体〉としての権威を獲得する。つまり、〈廣学生〉のもつ力は、彼自身の内在的なものではなく、〈歴史研究会〉の学生たちが警察にたいして持つている恐怖と警戒から生じたものである。このテキストには、監視・管理される側が監視・管理する側に回るときのディレンマがみごとに描かれている。それは、〈反体制〉という学生たちの〈主体〉の位置が、実際には〈体制〉に依存しているという逆説である。いかえれば、〈歴史研究会〉の学生たちを管理・監視する警察・国家権力と〈廣学生〉を管理・監視しようとする〈歴史研究会〉の学生たちの権力が類似性をもっている。

《歴史研究会》の学生たちは、《国家権力》を恐れたため、《贗学生》の処理を遅延してしまふ。そして、この問題解決の道がみえなくなる。つまり、①の木田の言葉のように、《歴史研究会》は、《贗学生》の《監禁》を続けるべきか、彼を放り出すべきかが、明瞭に判断できない。そのため、彼らはきわめて困難な状況へ陥らざるを得ない。《歴史研究会》の学生たちは、《監禁》の事態にたいし、何もできないという意識、あるいはどちらの道を選ぶべきかわからない状況を、一種の「どんづまり」の状態として受けとめている。

木田らが置かれている状況の困難さは、「はつきりしたことは何一つない」という言葉がよく表している。こうした状況は、彼らにとつて「やりきれない停滞」であり、「仕方がない」「まったくどうにもしようがない」「どんづまり」「泥沼」である。それで、この状況は、自分と《贗学生》の中で「どちらが監禁しているかわからないよ。やりきれないな」といいたす始末となる。この事態も、結局、《国家権力》を恐れ、自分たちの行動方針を自分で決めきれない《他者》的位置から生じるのである。みずからがおこした行為に、このように《歴史研究会》が認識すること自体が、《警察権力》の《主体》から《疎外》されている《他者》だという何よりもの証左であらう。

では、《監禁》は、どのような経緯をたどつて起こつたのか。このテキストでは、《贗学生》の《監禁》の過程は、明確に提示されてはいない。ただ、この事態の成立の経緯をしめす唯一の端緒は、《監禁》を積極的に行う木田の②の言葉である。

②「贗学生のこと：引用者注）始めは簡単に話を聞くだけで他の研究会と連絡をとる筈だったのにそれができない。そしていつのまにか監禁してしまつていたということだろう、重荷をせおいこんだなあ」（七三頁）

②は、《贗学生》を《監禁》しているさなか、木田が「用具室」で《女子学生》と休息するとき、彼女という言葉である。これをみる限り、《贗学生》を摘発した最初の段階では、この事態は、きわめて簡単な事実確認だけで終了するはずのものであった。だが、《贗学生》の処理は、《歴史研究会》の学生たちの最初の思いこみとは裏腹に、彼等が事態の危険さに気づいたときには、すでに人の《監禁》へと変貌してしまつたのだ。この状況は、②の言葉を語っている《歴史研究会》の木田だけでなく、《歴史研究会》のやり方に終始批判的な立場を取らうとする《女子学生》Ⅱ《私》にとつても同

様である。つまり、〈贖学生〉の処理は、「疑問な事項を訊ねるというくらいの」「軽」いことであったが、「それがいつのまにか監禁ということになってしまっただけで、〈女子学生〉は「その間の段階がはつきり掴めない」と考えるほどであった。

この状況は、事態そのものが、いかに行為者の意志を裏切るものであるかをよくしめしているといつてよい。つまり、〈監禁〉という事態には、行為者の意図と行為の結果の間の二律背反がある。結果的に〈贖学生〉を不法的に〈監禁〉することとなってしまったが、もともと〈歴史研究会〉の学生たちに目的があったわけではない。だが、彼らは、〈贖学生〉を「車」で「学生寮」に連れ込み、彼を閉じこめるといった行為をやり続ける。そして、事態の深刻さに気づいた時には、彼らは「どんづまり」の状態に陥っていたのだ。

ここで、〈歴史研究会〉の行為が、「どうしようもできない」「どんづまり」の状態、つまり〈監禁〉の状態までいたってしまったのも、〈歴史研究会〉が〈警察権力〉を恐れる〈他者〉であるからである。確かに、〈監禁〉は、行為者の意志と関係なしに、または彼らが自覚しない内に、いつのまにか犯してしまった事態である。しかし、厳密には、〈歴史研究会〉のメンバーの意識しない内に、彼らが収捨のできないほどの事態へとエスカレートして行く過程には、必然性があったといわざるをえない。それは、彼らが普段から〈警察権力〉を恐れているため、〈贖学生〉に「簡単」に「疑問な事項を訊ね」ようとしたことからはじまるからである。また、その内、〈贖学生〉を〈警察〉の〈スパイ〉かもしれないと危惧し、〈監禁〉へとエスカレートして行く。この意味で、〈監禁〉には、〈警察〉の〈スパイ〉という〈主体〉を恐れる〈他者〉としての〈歴史研究会〉の位置がある。そして、木田らは、〈贖学生〉の〈監禁〉が意図したものであるのではない、とすることで自己正当化を試みる欺瞞性をみせている。実際、この種の無目的性や非論理性のために生じた事態と、その行為者の意図との間には、はなはだしい裂け目が生じている。典型的な例は考察したとおり、〈贖学生〉の〈監禁〉に至る過程であり、そのあとに続く登場人物たちの行為にもみられる。たとえば、木田が、「まったくどうしていいかわからない」、あるいは「仕方がないよ」と自覚しながらも、〈贖学生〉が逃げ出すまで、〈監禁〉を積極的やり続けていることがあげられる。

しかし、〈贖学生〉が、縛られた「縄を食い切」って逃げ出した後も、木田にとつて、依然、「どんづまり」の状態は消えない。

③「あなたは、あの贖学生の監禁がいつまで続くのか不安がっていたのでしよう」と私は苛立ちに揺り動かされていった。「あの男が逃げて、やりきれない停滞が一応終わったのよ。これからいろんな厄介なことが始まるだろうけど、何も起らない不安な待機状態よりはいいわ」

「まったくどうにもしようがなくなっていたんだ」と木田は自分に納得させるために音節を強く区切りながらいった。

「どうにもなりようがなかったんだ。こうなっても、他により良い結果がありえたということじゃない、仕方がないんだ」

そして木田は私をみつめ、ためらいを押しきって低い声でいった。

「僕らの責任じゃない」

(七八頁)

③は、〈贖学生〉が逃げ出したあと、木田と〈女子学生〉〈私〉が交わす対話である。〈女子学生〉は、〈贖学生〉の脱出が「やりきれない停滞」の状態や「不安な待機状態」を終結させたと受けとめている。これに反して、木田は、たえず「仕方がない」、「なりようがない」、「僕らの責任じゃない」といい続けている。しかし、こういいながらも木田は、〈贖学生〉を縛りつけていた「木椅子」などの証拠物を燃やしたり、「不在証明」などを造ったりする。この意味で、こうした行為も、〈歴史研究会〉の学生たちの無目的性、非論理性の延長線上で起こるといえる。そして、〈贖学生〉を〈監禁〉していた〈本物〉の学生たちは、今度〈偽〉の状態、証拠湮滅や偽証などを生み出す立場に立たされたことになる。

三、〈本物〉／〈贖者〉の〈差異〉化

このテキストの〈監禁〉は、行為者の学生が〈国家権力〉を恐れる〈他者〉であったからこそ、彼らの意志とは二律背反的に成立している。〈他者〉の立場から起因する非論理性のため、〈贖学生〉の〈監禁〉事件そのものは、行為者側にとっても一種の「どんづまり」、あるいは「泥沼」の状態として受け止められていたのだ。

とはいえ、このテキストには、〈他者〉の左翼系学生たちに、〈監禁〉そのものを可能とする一つの必然性があつた。その必然性とは、一方は〈T大学〉の学生、もう一方は〈贗学生〉という、まさしく〈本物〉／〈贗者〉といった関係である。つまり、木田らは〈体制〉に反抗しているが、彼らを〈本物〉の〈T大学〉の学生としているのはまさにその〈体制〉そのものである。だから、〈本物〉である学生の非論理的な行為の裏面には、この〈本物〉／〈贗者〉といった関係性があつて、それにもとづいてはじめて〈監禁〉が成立する。なぜなら、〈贗学生〉という現象の時代的文脈はさておくとし、作品の随所に登場する〈本物〉／〈贗者〉の関係は、一種の〈支配／被支配〉の関係性をもっていることが読み取れるからである。たとえば、「広くて清潔な顔をし」た木田と「汚ねえ奴」として語られている〈贗学生〉の関係は、すでにこの〈本物〉と〈贗者〉の差異を暗示している。ところが、このような関係性を何よりもよく表すのは、大江健三郎の初期作品で著しくみられる、「被支配の屈辱を象徴する」〔動物〕の比喩表現である。たとえば、作品の中で何回も繰り返して描かれている〈動物〉や〈徴〉の比喩表現は、④⑤にみられる。

④ 木田に右腕を掴まれたまま頭をよじつて振りかえつた贗学生の大きく開いた眼は、おとなしく卑しい小動物を思わせ、私の心にわたかまる小さなためらいを押しきらせてしまう。
(一六八頁)

⑤ 私は密生した徴のように羞恥を躰の周りにはびこらせている贗学生の卑屈な柔順さや、時どき贗学生の躰の中でぐずぐず育ちかけては潰れてしまいういじけた怒りの厭らしさにやりきれないのだが、それと一緒にこみあげてくるおかしさがあつて、注意深く押えつけていなければ私はだらしなく笑いはじめるにちがひなかった。
(一九九頁)

④⑤の〈小動物〉や〈徴〉のイメージには、文字どおり「おとなしく」「柔順」に〈支配〉に従う〈被支配〉者の姿、ひいては「卑屈さ」さえ漂わす「卑しい」様子がある。この〈贗学生〉の姿は、もちろん〈監禁〉といった物理的な暴力にさらされているとはいえ、〈支配〉される者の屈辱への従順をよく表象している。さらに、〈女子学生〉〈私〉と木田が、〈贗学生〉にパンを与え、その一定の量でよすようにと命じ、パンにこだわる〈贗学生〉を抑制するや、〈贗学生〉は〈女子学生〉である「私の掌に激しく噛みつ」く。この場面は、一見すると、〈贗学生〉が〈被支配〉にたいする拒否を表す行為のようにみられる。しかし、これもやはり「贗学生は獣のように唸ると」という表現が表すように、〈動物的〉な行

為であることがわかる。また、木田は、「こいつは犬みたいに咬みつきやがって」「あいつは犬みたいに死にもぐるいだからなあ」という。これは、「贗学生」の行為が、「本物」の学生によって疎外・差別されている存在の行為にすぎないことを意味する。

〈贗学生〉にパンを食べさせる一連の場面がしめすように、すでに〈本物〉の大学生と〈贗学生〉の間には、あたかも人間が〈動物〉を檻に閉じ込めて〈飼育〉するような関係が成立している。これは、ある地方の谷間の町に、撃墜された飛行機から、落下傘で降下してきた黒人兵士を地下倉に閉じ込め、その間に起こる一連の事態を〈飼育〉と表象したと同様である。この〈飼育〉を連想させるのは、この食事の場面だけではなく、〈贗学生〉の排泄の場面にも十分に認められる。〈贗学生〉は、小便はもちろん、大便も、木田と〈女子学生〉が見張る前でするように強いられている。〈排泄〉は、最も人にさらしたくない行為である。しかし、この〈排泄〉さえ、いつも木田と〈女子学生〉の前でしか許されていない。このことは、まさしく〈贗学生〉の〈動物化〉であり、〈本物〉の学生側からすると、〈飼育〉の行為なのである。

「それほど空腹に苦しんでいる筈」がないのに、「贗学生」のしつかり見ひらかれた眼に狼狽した小さな動物揺が浮かび、彼は眼をふせて私の足もとの汚れたパン屑を未練がましく見つめ始めている。この様子も、〈動物〉の行為そのものを表象している。そして、こうした関係をもっともよく表すのは、〈贗学生〉の〈監禁〉に同じく参加しているが、〈歴史研究会〉の学生とは異なつた視点に位置していた〈女子学生〉の「あの男を何十年か家畜みたいに飼うといいわよ」といった言葉である。

このテキストは、実際、〈贗学生〉をただ〈動物〉に喩え〈擬動物化〉しているだけではなく、すでに論じたように、その根底には当然のこと、はなはだしい〈差異〉化の視線がある。

⑥ 「僕はあの男が卑劣なおどおどした表情で僕らをうかがっているのに気がつくど苛立たしい無力感にとらえられてしまふ。とにかくひどく厭な疲れかたをする」

「あの男だつて、厭な疲れに身も世もないと思うわ。もしかしたら絶望しているかもしれない。汚れた動物みたいな顔してね」と私はいった。絶望という言葉が、便所であなだれて蹲みこみ真剣に排泄していた贗学生には決して結びつかない。それはしつくりしなくぐらぐらする。私は小さく笑った。「あんなに汚くてちっぽけな男が絶望したと

ところでどうということはないさ」と木田が私の笑いに反撥した激しきであった。

(七四頁)

⑥には、〈本物〉が〈贗者〉にたいしてとる〈差異〉のスタンスが、よく描かれている。ここで、〈監禁〉を直面し、〈本物〉の大学生たちは「無力感」や「厭な疲れ」さを感じることが出来る。これに比べて、〈贗学生〉は、「汚れた動物みたいな」存在として、どのような状況の下でも、人間的感情を表す「絶望という言葉」が、けつして似合わない、あるいは全然重要でない存在である。〈絶望〉する権利を持つ者とその権利を持たない者の〈差異〉化である。この〈差異〉は、いいかえれば〈飼育〉を受ける側と〈飼育〉をする側の関係の表れである。

たとえば、⑦の〈贗学生〉の「排泄」のあとにトイレに入った〈女子学生〉の考えをみる。

⑦私は贗学生の使用したコンパートメントへ入りしつかりと厚いドアを閉ざし、柏の葉の記号の打出された掛金をおろした。自分が確実に保護され、しかも独立し、力に満ちているという感情が疲れをおおいかくして私をとらえる。

(六九頁)

〈贗学生〉の場合、「水洗式の便器に跨って」「排泄」する過程は、すべて見張る学生の眼にさらされていた。しかし、〈女子学生〉は、その必要はないのだ。ただ、一人で一つの「コンパートメント」を占め、そこで「自分が確実に保護され、しかも独立し」ているという一種の優越感を味わうだけですむ。つまり、〈女子学生〉は、〈贗学生〉の〈監禁〉を批判的に受けとめてはいるが、彼女さえも、〈贗学生〉にいかなる人間的な感情も許そうとはしない。しかし、〈贗学生〉の〈監禁〉の状態と〈女子学生〉のトイレ個室の安心感は通底するものである。

非論理的な行為で、「いつの間にか」生じてしまった〈監禁〉を支える〈差異〉化は、〈他者〉である〈歴史研究会〉の学生たちが、自己の〈本物〉という〈主体〉性を主張する行為である。〈歴史研究会〉の学生たちは、〈贗学生〉の人間性を奪い取り、また、彼を〈動物〉化し〈飼育〉する。こうした差別化の試みは、〈他者〉的存在の彼らが、〈本物〉の学生という立場から〈主体〉性を主張するためであった。だから、彼らは、この事態を「やりきれない停滞」とか、「仕方がない」「どんづまり」と感じながらも、〈贗学生〉を「監禁し」続けることができたのである。この意味で、この〈差異〉

化こそ、〈本物〉と〈贋者〉を支える根拠となり、この物語の真の出発点となっている。

四、〈真〉／〈偽〉と〈本物〉／〈贋者〉の戯れ——立場の〈あいまい性〉——

『偽証の時』における、一種の〈差異〉化にもとづく〈本物〉／〈贋者〉の関係性は、固定したものではない。このテキストは、〈真〉の〈偽〉への可変性、〈偽〉の〈真〉への可変性が、複雑に絡み合っている。このことは、〈本物〉に属するはずであった、木田が、「廊下の灯りの下で血色が悪く厭な艶をもっている」と叙述された箇所を境に、〈歴史研究会〉の学生たちは、〈偽証〉をする立場に転じざるを得なくなった、といった事実にもみられる。また、この木田の皮膚の汚さが認識される時点は、〈贋学生〉が自分を縛っていた縄を噛みきって逃げ出した時とちょうど重なっている。

はじめには〈本物〉であった〈歴史研究会〉の学生たちは、この逃げ出した〈贋者〉を恐れて、〈贋者〉を〈監禁〉した痕跡、つまり〈証拠〉を湮滅し、「不在証明を偽証」すべき立場へと転じた時、彼らは「あの虫のような青年（贋学生：引用者注）」と同位置に転落する。これをテキストは次のようにいう。「私たちはそれぞれ一匹のぐったりした巨きい毛虫のように蛛の周りに徹のような不安の繊毛をびっしりつきだし、息がつかまるほど危機にみちた日常を闘って行かなければならない」（七九頁）。これは、〈動物化〉された〈贋〉の位置への変貌である。この学生たちが〈偽〉ないし〈贋〉へと転じた時期は、〈贋学生〉が〈真〉ないし〈本物〉へと変貌した時期でもある。それは、〈警察〉に告知した〈贋学生〉の告訴の「証言」が、避けがたい〈真〉の事実にもとづくことになるからである。そして、このテキストには、一人の〈贋学生〉が、〈本物〉の事実を証言する立場へといたり、多数の〈本物〉の学生が、〈偽〉の事実を証言する立場へといたる。このように、『偽証の時』は、立場の逆転が交差する物語だといえる。

しかし、〈偽〉への転落（偽証）行為は、単に〈歴史研究会〉の学生たちだけに限っているわけではない。これには、この事態とは無関係なる様々な人々が関与している。たとえば、学校当局の「営繕課」は、〈監禁〉に関係する施設を改変し、「証拠湮滅」する。そして、〈T大学〉の教授たちは、〈監禁〉を犯した学生の「不在証明」のため、法廷で偽証する。さらに、木田と〈女子学生〉の証拠湮滅を目撃し、〈贋学生〉の監禁を知っていた〈T大学〉の多くの学生たちは、沈黙する。このことは、〈偽証〉への直接・間接的な関与に他ならない。つまり、このテキストに登場する大多数の人々

は、〈偽〉へと転じているのである。また、これは、〈歴史研究会〉の学生たちが反抗しているはずの大学制度が逆にその学生たちを守っていることを意味する。

この〈スパイ〉だと思われた〈贗学生〉が単なる〈贗学生〉となったとき、その関係性は一変する。先述のように、左翼の〈他者〉的な存在であった〈歴史研究会〉はいうまでもなく、〈T大学〉や〈T大学〉の〈教授〉〈学生〉までが、〈贗学生〉との関係で、みずからが〈本物〉という〈主体〉性を主張したがる。そのため、彼らは、明らかに〈歴史研究会〉が犯した〈監禁〉事実を隠蔽するのである。こうした大多数の〈本物〉が〈偽証〉をするという事態は、単に〈偽〉の行為ではない。かえって、これは〈真〉という〈主体〉の主張なのである。こうした行為は、真実はみずからの側にあると〈偽証〉を用いてまで主張しようとする〈主体〉側の権力志向をしめしている。この意味で、このテキストには、〈真〉と〈偽〉の戯れによる〈主体〉〈他者〉の位置の交替が起こる。このことは、すべての〈偽〉は〈真〉であり、または、すべての〈真〉が〈偽〉でもありうるという蓋然性を呼び起こす。たとえば、これは、〈女子学生〉〈私〉がこの事態を判断する、⑧の引用によく表れている。

⑧ 私はその古風な建造物の中の狭い部屋で精神鑑定をうけている贗学生の表情を考えた。それが胸をしめつける激しさで歴史研究会の木椅子に縛りつけられている贗学生のものうい眼の色とからみあう。あの男は今も病院の個室で完璧な被害者の顔つきでうなだれているだろう。木田も安西も独房で〈被害者〉の表情をし、まちがってとらえられた女子大生は、もっとはっきり〈被害者〉になりきっているだろう。そして逮捕されなくて暗い苛立ちと卑劣な喜びにみだされている私は汚れた手を洗わない〈加害者〉なのだ。いつまでも〈被害者〉にはなれない。そしてこんな厭らしい日常を苦しみながら耐えねばならない。

(九一頁)

⑧は、〈女子学生〉を除いて、誰もが〈被害者〉であることをしめしている。〈女子学生〉を除く誰もが〈被害者〉を演じる、あるいはより〈被害者〉であることで自己を正当化している。ある意味で、〈被害者〉同士の連帯感が生じている。実際、〈女子学生〉は、〈監禁〉の唯一確実な〈証拠〉である、〈贗学生〉に噛まれた掌の傷を持っている。だから、彼女だけは、噛まれたことの〈被害者〉ではあるが、〈贗学生〉と逮捕された〈本物〉の学生が相互に〈被害者〉の役を演じ

あうこのシナリオでは《被害者》にはなれないのだ。いや状況上、誰もが《被害者》を演じ、事態の成り行きもそのよう
 に変わっていることがよく暗示されている。つまり、現実的には、《女子学生》を含め《監禁》の一連の過程にかかわつ
 たあらゆる人が、表面上、《被害者》になつていた。このことは、《贗学生》の精神鑑定を担当した病院側の「曖昧な」発
 表があつたあと、安西と木田の保釈を祝う集まりの場面からわかることだ。⑨の引用は、この祝い会に、いきなり《贗学
 生》と一緒に訪れた彼の母親が、「この子が木田さんたちにお迷惑をおかけいたしました。この子は、木田さんたちに監
 禁されたと嘘を申しました。この子をお許しください、今はすっかり後悔しているのでございます」（九五頁）という謝
 罪にたいし、安西が語つた答えである。

⑨ 贗学生は木椅子に縛りつけられていた時と同じ、あきらめきつた、おどおどした表情ですすり泣き続ける母親の傍に
 立っていた。

「僕らはこの人を許してあげよう」と安西が澀んでいる沈黙をかきたてるようにいった。「加害者はこの人ではなかつ
 たんだ。彼は僕らと同じように被害者だ。彼を僕たちの仲間にうけいれよう。僕たちは協力して、ほんとうの加害
 者、最も憎むべき加害者を見つけたとして戦おう」
 （九五頁）

⑨をみる限り、実際の《偽証》を述べたのは、かえつて《贗学生》であつて、それも、「強度の神経衰弱でいろんな妄
 想を自分で考えだしてしま」つた結果であるということにされている。つまり、《贗》の学生における《本物》の事実の
 証言が、《偽》の証言となり、《本物》の学生における《偽》の事実の証言が《本物》の証言となるという、ふたたび立場
 の逆転が起こる。というより、むしろこの立場は、極めて《あいまい》な状況、どちらも《被害者》という立場へと変
 わっているのだ。つまり、《監禁》や《偽証》を犯した学生たちが、《監禁》された《贗学生》を許すことにより、どちら
 が《偽》なのか《真》なのかという争いはここにいたり、ともに《真》となり、ともに《偽》となる。

こうした状況の転換は、この欺瞞的な状況下で「怒りに揺さぶられた」《女子学生》《私》が、《監禁》の事実性を提起
 すると、この問題提起が検事の真似であると無視されてからかわれることからわかる。

⑩部屋にみちた学生たちは笑いどよめき、木田と安西も幸福そうに笑っていた。私は贗学生さえ、すすり泣きをやめて鳥のような眼を見はつている母親の傍でおどした稚い笑いを浮かべているのを見た。
(九七頁)

唯一の《証拠》を持つている《女子学生》の事実証言も、ある一方が《偽》ならば、他方が《真》なるはずなのに、しかし《真偽》が判別できない二つの側から同時に笑われてしまう。

結論的にいえば、『偽証の時』は、このように《真》／《偽》、そして《本物》／《贗者》をめぐった対立が、状況次第できわめて《あいまい》になることを示唆している。確かに、その一方が、もう一方を排除するはずであったが、その立場は事態の最後にたどり着いて《あいまい》に融合されている。それによつて、どちらも《真》（《本物》）でありえ、また、《偽》（《贗者》）でもありうることをしめしている。ある意味で、《歴史研究会》の学生たちと《贗学生》の間には、オキシモロ的な「相離れない」「共同作業」、「共犯関係」が形成されている。ここでいう「共同作業」「共犯関係」は、木田が《贗学生》を縄で縛る過程（《監禁》の最初）を叙述した《女子学生》の言葉である。このように、このテキストの《監禁》をはじめあらゆる事態は、この両者の「相離れない」「共犯的關係」により成り立っている。そして、この両者の關係こそ、《真》と《偽》の戯れなのである。

五、《女子学生》の《躰き》——《加害者》と《被害者》の間——

大江健三郎の初期作品では、女性（主として女子大学生）の登場人物は、男性主人公（主として大学生）の対の役として必ず登場するが、その存在性の比重は極めて低い。つまり、「《女》」に意図的な役割を与えていないし、「女子学生は端役にすぎない」⁹の一般的な意味である。この意味で、『偽証の時』は、大江の初期作品の中では例外的なものである。これは、《女子学生》が《私》として語り手の役割を担っているからというだけではない。このテキストは、《女子学生》が、《贗学生》の《監禁》にたいする唯一の批判者として登場するという点で、より大きな意味を付与することができる。

実際、前述したとおり、先行論は、「証拠湮滅、偽証、瞞着も辞さぬ左翼学生、ならびにそのシンパと覚しき教師、事務局などの、道徳的に腐敗した体質に対する怒り」¹⁰を表現する代表的な役割が、《女子学生》に担わされているとして

いる。いいかえれば、「この作品は女子学生の眼をとおして学生の運動のリーダーが批判されている」という意味で、「女子学生」〈私〉は、「主体的真実」の唯一の担い手としてみなされている。

この作品は一見すると、そうした読み取りが、極めて当然のことであるかのように思える。だが、果たして、「女子学生」は、「集団的欺瞞」に対抗する「主体的真実」の担い手だとい切ることができるか。まず、「証拠湮滅」の側面に限ると、彼女は決して「集団的欺瞞」に対抗し、「主体的真実」を貫いていると断じることができない。

①「どうするの」と私はいった。「このまま逃がしておくの?」「仕方がないよ」と唇の内側で潰れる声で木田がゆっくりいった。「どうすることもできない」「あの男は警察にとびこむわ」「安西のところへ連絡しよう」と木田が研究会のキャップの名前をいった。「電話はないでしょう?」「間にあわないな」と木田が腰を下していった。「警察がすぐに来るかもしれない」

「椅子や縄を燃してしまっただ方がいいわ」と私はいった。

「あの男を訊問したノートがあるでしょう、あれも焼いた方がいい」(中略)

私は床に直接置かれた書類箱から大学ノートを取り出し、それと重ねられた左翼系の雑誌をまとめてぐるぐる巻きにした。部屋には私の持物は何一つ残っていない筈だった。

(七六―七七頁)

①の「証拠湮滅」の過程をみると、彼女が終始一貫して「集団的欺瞞」に反抗したとはいえない。〈女子学生〉はむしろ、木田以上に〈贗学生〉の逃走を気にし、彼女みずから進んで「証拠湮滅」に積極的に取り組む。それで、木田に、「椅子」や「縄」、そして「訊問のノート」を燃やすことを勧め、「電灯を消してから私は気がつき、事務机の下の踏みまじられたパンのかけらを念入りに新聞紙の上に拾いとるとそれを外套のポケットに押しこんだ」(七七頁)ほど、綿密周到に「証拠湮滅」に積極的である。だから、〈女子学生〉は、「集団的欺瞞」の内容である〈偽証〉および「証拠湮滅」に一定の距離を保っていたとはいえない。

彼女は、この「証拠湮滅」の過程だけでなく、〈贗学生〉が逃走したことをみるや否や、「学校の中に隠れているのじゃないかしら」とか、「運動場の木小屋にでもひそんでいるかもしれないわ」とかいって、木田をして〈贗学生〉を探すよ

うに誘ってもある。〈贗学生〉が逃走してまもない頃の、〈贗学生〉の搜索過程や「証拠湮滅」の過程でみせた〈女子学生〉の行動は、少なくとも、一連の「証拠湮滅」の過程の始発点となる。この意味で、〈女子学生〉は、〈歴史研究会〉の学生たちの汚点を分かち合っているともいえる。

この渦中で、彼女は心の中で良心の呵責を感じている。むしろ、この意識は、〈贗学生〉の〈監禁〉の時、木田がそうであったように、〈監禁〉に疑問を感じていた頃からはじまる。それは、「寒さに震えながら極めて厭らしい仕事、屈辱的な仕事に熱中している十九歳の女子学生だった」（六八頁）という語りがしめすように、彼女がこの仕事への参加を否定的な観点からみているからである。にもかかわらず、彼女は、この〈監禁〉への参加、時にはきわめて能動的な参加とこの欺瞞的な仕事への懐疑や拒否との間をたえず往復している。

⑫「私は腕を組みあいたいと思ったことがないのよ」と私は木田から身をひいていった。「これ以上、私を組みきれないでもらいたいわ」

歴史研究会のキャップの安西から、贗学生の監禁に加わった学生たちに、その不在証明を作るようにという指示がでていた。そして安西たちは監禁の事実をうらづける物的証拠を可能なかぎり打ちこわす、じめじめして陰険な仕事を始めている様子だったが、私はそういう虚しいにきまっている孤独な努力をしようとは思わなかった。

（七九～八〇頁）

⑬のように、〈女子学生〉は、「不在証明」を作ろうとする〈偽証〉の行為を拒否しているため、「私はそんなことはできない」とはつきりいう。そして、〈女子学生〉は、「不在証明」を作ること、「証拠湮滅」をすることをすべきだという安西や木田を、「恥知らずなだらしない青年」だと思ひこんでしまう。しかし、〈女子学生〉のこの考えと、〈贗学生〉が逃げ出したときにみせた彼女の姿勢にはかなりの距離がある。それは、自己矛盾する姿勢である。この姿勢の隔たりは一応おくとしても、彼女は激しい煩悶の中で、こうした姿勢をふたたび取り下げて「それは極めて当然なことなのだった」と考え、その「不在証明」を作ろうとする。こうした二つの中心点を往復する彼女の態度は反復される。つまり、〈歴史研究会〉の会員である原田に「これ以上、こんなことに首をつつこんでかかずりにあいたくないのよ」というが、結局は、安

西と木田の釈放のため、〈贖学生〉の精神鑑定を担当している大学病院の医師を訪れたりする。

『偽証の時』が発表された『文学界』の目次の紹介文には、「馴れ合いの中に埋もれた贖学生不法監禁事件の真実は私の掌に残る傷の痛みが知っている」とある。この紹介文のように、〈女子学生〉〈私〉だけは、その監禁事件の証拠・真実を身につけている。だが、彼女は、能動的にその真実を呈示することができなかった。「あの人（ある女子学生・引用者注）が逮捕されるのを見つめていた、私は卑劣だ、と私は考えた。私は恥かしさで胸をしめつけられた」のような考え、あるいは「怒りと激しい無力感」といったことを「真実」にこめて世にさらすことはできなかった。この意味で、〈女子学生〉〈私〉は、たえず〈加害者〉の立場と〈被害者〉の立場、つまり〈真〉と〈偽〉の間を往復する〈中間〉的存在といえる。もちろん、彼女は、この物語の最後の場面で、「私たちがその贖学生を監禁したことは事実です」のように、「真実」を叫んではいる。しかし、この叫びは、これ以上の「真実」ではない。なぜなら、〈女子学生〉が「真実」を叫んだその場は、すでに、〈加害者〉も〈被害者〉も〈あいまい〉な状況となっていて、〈加害者〉〈被害者〉といった対立項は失われていたからである。むしろ、彼女の「真実」の言葉は、〈歴史研究会〉の学生たちにはもちろん、〈贖学生〉にも笑われることとなる。つまり、彼女は、この二つの項をたえず往復する〈中間〉的な存在であったからこそ、両方から疎外され〈他者〉化されている。だから、この「叫びの声」が通じる道はないのだ。あらゆることが「偽証の時」であるからこそ。〈女子学生〉は、手の傷という「証拠」とともに、「主體的真実」の担い手となる可能性を持つてはいた。だが、彼女は、結局、その担い手になりえなかった。それは、彼女さえもが、どのような確信をも持たず、〈加害者〉の立場と〈被害者〉の立場との間をたえず往復した結果であるといえよう。

六、むすび

文壇のデビュー作となった『奇妙な仕事』が、一九五七年東京大学五月際の文学賞を受けたとき、大江は、『東京大学新聞』にその「受賞の言葉」として次のようにいう。

昨日、全学連の指令したストライキがあった。僕は現実的にその成果と書を検討する立場に今はいない。しかし東

大の文学部の学生が出したビラの文章の非論理と不正確な事実の伝え方には僕は承服できない。また一部の学生たちの討論の仕方の煽動的な無責任さに僕は承服できない。

僕の同じ学校の仲間、最も理解しあえる場にいる仲間を説得するのに、論理的な誠実を守ることさえしないのはなぜか。僕ら、一つの学校で勉強している仲間の中に、非論理と煽動にみちた卑劣な文章があふれ、理解しあうための討論があふりたてる演説にすりかえられたあと、その後にくるものは何か。

この引用は、「砂川闘争」への参加の経験を「屈辱」としてとらえている箇所次にくる。大江は、当時、学生運動の主導的な立場にいる「学生たち」を「非論理」、「無責任」、「卑劣」としてとらえた。そして、こうした学生運動の担い手たちにたいする姿勢をイメージ化し、作品化したものがまさしくこの『偽証の時』だといえる。

しかし、このテキストは左翼系の学生たちの「非論理」、「無責任」、「卑劣」だけを描いていないことが注目されることである。つまり、このテキストの〈歴史研究会〉の「非論理性」は、まず〈他者〉的位置と〈主体〉的位置の緊張関係によるものと思える。たとえば、〈歴史研究会〉のリーダー格である木田が、〈贖学生〉を〈監禁〉している状況を「まったくどうしていいかわからない」、あるいは「仕方がないよ」と認識しながらも、その〈贖学生〉が逃げ出す直前まで、彼を〈動物〉化し差別しつつ、その〈監禁〉の行為を積極的やり続けていることがあげられる。こうした行為の背後には、〈警察権力〉を恐れる〈他者〉の立場と、〈本物〉という〈主体〉の立場の交差がある。

それだけではなく、〈歴史研究会〉の学生たちは、〈偽証〉という〈偽〉の立場を取ろうとすればするほど、彼らはたえず〈本物〉の学生という体制内部の〈主体〉の立場に立つ。逆にいって、〈贖学生〉が、〈監禁〉事件の〈真〉を明らかにしようとするほど、彼は〈本物〉の〈偽証〉により、この証言は〈偽〉をいう〈他者〉になってしまう。ここに、このテキストの「非論理性」、すなわち〈真〉／〈偽〉の戯れがある。

このため、〈真〉／〈偽〉、そして〈本物〉／〈贖者〉をめぐった対立が、きわめて〈あいまい〉にされてしまう。確かに、ある一方が、もう一方を排除するはずであったのに、両側の立場は、出来事の最後に〈あいまい〉に融合され、オキシモロンのな「相離れない」「共犯的關係」を結んでいるのだ。そして、これと連動するかのようには、「主体的真実」の担い手である可能性を〈自分の手の傷〉として保っていた〈女子学生〉も、〈加害者〉の立場と〈被害者〉の立場へとたえず往

復する「中間」者の立場をとっていた。このため、「真」と「偽」の交差する中、「真実」をいおうとする彼女は、「両方から（疎外）されてしまう。つまり、「真」と「偽」の戯れの中、彼女のみが唯一に「他者」化されているといえよう。

注

本稿に引用したテキストは、「大江健三郎全作品第Ⅰ期第一巻」（新潮社、一九七〇年）による。「偽証の時」からの引用は、頁数のみを付すことにする。

- (1) 篠原茂「大江健三郎文学事典」スタジオVIC、一九八四年、六九頁、「報復する青年」参考。大江は創作方法の側面で同じ物語を対立的に設定し、一つの組をなすように二つの作品を書いた場合が何回もある。以上の二つの作品以外に、「人間の羊」と「飼育」、「死者の奢り」と「懐かしい年への手紙」などの例を取りあげることができる。
- (2) 中村泰行「大江健三郎—文学の軌跡」新日本出版社、一九九五年、三三—三三三頁。
- (3) 宮内豊「大江健三郎覚え書」三田文学—大江健三郎、一九六八年二月、四二頁。
- (4) 篠原茂「大江健三郎論」東邦出版社、一九七四年、五七頁。
- (5) 漢字の「偽」と「贗」は、共に「にせ」、「いつわり」などの同じ意味性を持っている文字である（『大漢和辞典』大修館書店、一九八九年により）。
- (6) 木村幸雄「大江健三郎の初期短篇について—「人間の羊」と「不意の唾」『言文』第三四号、一九八六年、三頁。
- (7) 篠原茂「大江健三郎文学事典」、「飼育」の欄参考。
- (8) 大江の初期作品、たとえば「奇妙な仕事」、「死者の奢り」には「女子学生」が端役として登場しながらも、構想上において重要な位置を占めている。
- (9) 岩谷征捷「大江健三郎、初期作品における「女」の役割」『昭和文学研究』第一集、一九八五年七月、六五頁。
- (10) 宮内豊、前掲論文、四二頁。
- (11) 中村泰行、前掲論文、三三—三三三頁。
- (12) 宮内豊、前掲論文、四二頁。
- (13) 『文学界』一九五七年一〇月号の目次で、「偽証の時」について以上のような紹介文がつけられている。
- (14) 大江健三郎「受賞の言葉」『東京大学新聞』、一九五七年五月二日。